

全米退職者協会

パーキンス次期理事長に同行して

加藤 長（東京都／日本労協連・国際部長）

1996年11月21日から29日まで、全米退職者協会（AARP）のジョセフ・S・パーキンス次期理事長が、日本労働者協同組合（労協）連合会と協同総合研究所の招きで訪日した。23、24の両日仙台でおこなわれた「いま協同を問う'96全国集会」での講演と28日に東京で開かれた講演会のために日本を訪れたものだが、来日中、厚生省、労働省を表敬訪問したり、日本労働者協同組合連合会の指導部と会談したり、さらには記者会見と二つの新聞からのインタビューにも応じるなど密度の濃い訪問であった。また、こうした日程の合間をぬって、仙台近郊の松島、広島、京都、東京の浅草を観光のため訪れた。パーキンス氏には、娘のエリザベス・シャワーマンさんも、AARPの配慮で同行した。私は、パーキンス氏と娘さんの訪日中の全行程に同行したので、その訪日の報告をするとともに若干の感想についても述べてみたい。

まず、訪日に至る経過だが、96年4月に勝部欣一・協同総合研究所副理事長、坂林哲雄・同研究所専務、武市ゆう子・センター事業団東京南部事業所長の3人からなる労協連合会と協同総合研究所の代表団が訪米し、AARPにたいし代表の訪日の招待をしたのにたいして、折りよく理事会の最中で、パーキンス氏を派遣することを即決したのであった。パーキンス氏は、招請当時は副理事長であったが、その直後の5月の大会（2年に1度開催）で次期理事長に選ばれている。AARPは、理事長に2年の任期制を設けていて、2年経つと自動的に次期理事長が理事長に就任するシス

テムになっている。つまり、パーキンス氏は、1998年の次期大会で自動的に理事長に就任することが見込まれている人物である。

ついでにいえば、AARPでは理事長は男性と女性が交替であることが決められており、また理事長を含め理事は全員がボランティアであるという。AARPには、約1800人の有給のスタッフがいるが、そのほかに約40万人をボランティアとして各種の活動に組織しており、このボランティア活動が活発なことが同組織の大きい特徴になっているようである。「奉仕されるのではなく奉仕する」という彼らのスローガンにもそのことがうかがわれる。

訪日中のパーキンス氏の言明から、AARPの特徴について感じたことを若干のべてみよう。パーキンス氏は仙台の全体集会の講演でも東京での講演でも、目隠しをして象をなでる3人の人のたとえ話をし、鼻に触れば蛇のようだし、足に触れば木のようだと、AARPが多面的な組織であることを強調した。実際、その活動の多面的なことは驚くべきものがある。

AARPの創設にあたっては、1947年当時、エセル・パーシー・アンドラス博士が退職した教員の健康保険を求めて各保険会社とかけあったが「退職者はリスクが大きい」とあちこちで断られたという。しかし、退職教員に保険加入の道が開かれると、他の退職者も大量に加入し、これが1958年のAARPの創設につながった。

その後、会員が3000万人にまで増えた秘密につ

いては、マスコミを含め各所でパーキンス氏に質問がでた。彼は、保険を広くかけていることとともに、年間会費8ドル(約900円)で隔月刊の雑誌「モダン・マチュリティ」と月刊の新聞「AARP通信」を無料で送る制度がありそれぞれ質の高い出版物であること、AARPの会員カードをみせれば全米の多くのホテル、リゾート、レストラン、レンタカーなどが1割から2割引いてくれること、を大きい理由としてあげた。このほか、薬品の通信販売やクレジット・カード、高齢者の自動車運転の再教育(講習を受ければ保険料が安くなる)なども会員にとって大きい魅力になっているようである。パーキンス氏は、こういう特典だけに惹かれて会員になっているものも多いことを指摘していた。

しかし、それはAARPの活動の一部にすぎない。同組織の面目を如何なく發揮していると思われる活動が少なくとも他に三つある。第1は、高齢者の権利を擁護するための立法活動である。例えば、AARPは65歳定年制は時代遅れだとして、法律を改正する運動を繰り広げ、1986年に定年制禁止法案を議会で通すことに成功した。AARPは、大統領と会見したり、議会の公聴会で証言したり、あるいは「AARP通信」でそのためのキャンペーンを繰り広げたりしたという。また、この法案通過後も高齢者の就職差別の動きが後を絶たないため、AARPの弁護士が差別を告発する訴訟を援助しているという話も聞いた。パーキンス氏は「自分は2年前までボラロイド社の人事部で働いていたが、定年制を設けずに高齢でも週に3日くらい働きつづけるシステムを導入した。他の企業にも同様な方向が打ち出せないか働きかけているところだ」と語っていた。

第2は、低所得の高齢者の雇用確保のための活動である。パーキンス氏は「AARPは職業安定所機能は果たしていない」といっていたが、30年余り前から「高齢者コミュニティ・プログラム雇用サービス」(SCSEP)という計画を実施していて、55歳以上の人々にパートで働きながら技術を習得させ、企業などに送りだしている。この

計画の便宜を受ける人は年間1万2000人、労働省が90%、AARPが10%の出資をして計画を進めているという。

第3は、コミュニティ・サービスである。AARPが近年重視して取り組んでいるのは「自立した生活のためのコネクション」と呼ばれる計画であるが、これは、在宅での高齢者の生活を支援するためにボランティアが家屋の修理や造園、手紙書き、配食、医師や食料品店への輸送手段の提供などの活動をおこなうものである。同時に、税務相談や配偶者を失った独居老人のための訪問・相談活動なども重視して取り組んでいると、パーキンス氏は強調していた。

ボランティアについては、登録制度ができていて、高齢者が「ボランティア・バンク」に得意の分野で社会貢献できるよう登録し活動しているようである。ボランティアは、基本的に無給だが、交通費や宿泊費その他の実費は支払われている。

このボランティア活動の主要な舞台になっているのが、全国に4000カ所あるAARPの支部(チャプター)である。パーキンス氏によると、全米に5カ所あるAARPの地方事務所、21カ所ある州事務所とは異なり、支部は比較的ルーズな組織で、常設の事務所がなく支部長さん宅が事務所になっているところも多いという。このため、シティ・ホールなどが集会の場所に使われているようだが、それでも、必ず規約をもち、月一回程度集まりをもっているそうである。そして、この支部を舞台にさまざまな高齢者向け在宅活動がボランティアの手で進められている。パーキンス氏は「日本と同様アメリカでも、高齢化が急速に進んでいる。今後コミュニティでの活動はますます重要になるだろう」と語っていた。

東京での講演でコメンテーターになった大内力東大名誉教授は、「アメリカでボランティア活動が旺盛なのは、プロテスタントの伝統もあるのだろう。日本でそれだけのことをするには大変な努力がいる」といわれていた。しかし、日本でも近年阪神大震災などを契機にNPO(非営利組織)の活動が活発になっており、ボランティア活動の

発展については学ぶところが大きい気がする。

このように活発な活動を繰り広げているAARPであるが、今後の課題がないわけではない。その最大のものが、ベビーブーマー（団塊）の世代への対策である。そのことは、厚生省、労働省を表敬訪問した際にも、新聞とのインタビューでも問題になった。クリントン大統領は、1996年8月に50歳になり、会費を払ってAARPの会員になったということであるが、パークキンス氏によると「彼らベビーブーマーの世代は一般に組織に入ることを嫌がる傾向がある。彼らがいま、AARPへの入会資格のある50歳にさしかかっているが、今後この世代の人たちがどれだけ加盟してくるか、加盟してもどれだけ組織に留まるかは未知数だ。また彼らの中には高齢者組織は圧力団体だといって公然と批判するものもある」という。そしてパークキンス氏は、「2年後に自分が理事長になったら、こうした世代間の対立をなくし、協調の方向にもっていくのが大きい課題となろう」と語っていた。

約2時間おこなわれたパークキンス氏と永戸理事長ら労協連合会指導部との会談では、大方の問題で意見が一致し、「有益な意見交換だった。今後双方ともいっそう互いに学び合っていこう」ということになった。日本の労協連合会側からは、来年大型の代表団をアメリカに送って、AARPの経験をいっそう学んでいきたい、との意向が表明された。

労働省では広見和夫総務審議官、厚生省では辻哲夫官房政策課長、江口隆裕福祉局老人福祉振興課長が対応された。労働省は以前からAARPの活動に注目していたとのことであり、また、厚生省では双方から高齢者の自立を促進する方向で支援することの重要性が強調された。

滞在中、記者会見の他に日経新聞、読売新聞からのインタビューがあり、それぞれ12月12日付夕刊と12月9日付朝刊（関西版）に大きく掲載された。両紙が目指してとりあげた点は、定年制廃止でAARPが大きい力を発揮したこと、組織づくりに工夫していることであった。

最後になるが、若干のエピソードを紹介しておこう。パークキンス氏は日本語の「生き甲斐」という言葉を覚えて日本にやってきた。アメリカで最近「生き甲斐」についての本が出版され、同氏もすぐに読んだという。「英語に訳すと、生きる意味か生きる目的くらいになるだろうが、それでは十分に日本語の意味が伝わらない。高齢者にとって生き甲斐は重要だ」とパークキンス氏。東京の日比谷公園で労協のメンバーが清掃しているのにあった際には「彼らは生き甲斐をもって仕事をしているようだ」と写真をとっていた。

朝鮮戦争に通信兵として従軍した際、日本を通過して以来、40数年ぶりに日本を訪問したパークキンス氏。日本がすっかり復興し、発展したことに盛んに感心していた。「新幹線のスピードといい、地下鉄の快適さ、清潔さといい、日本の方がアメリカより上だ。何よりも人を尊重する雰囲気がいい。アメリカにはなくなった古きよきものが日本にはまだ残っているようだ」

娘のエリザベスさんは、6歳と2歳の2児を家に置いての長期旅行なので家族のことが気になるようであったが、松島でも京都でも日本の紅葉を堪能し、満足した様子。帰国に先立って成田空港で「日本の何がもっとも印象的だったか」と質問を受けたのにたいし「風景もあるが、やはり人と知合えたこと。人間です」と語っていた。今回のパークキンス氏の日本訪問は、何よりも互いに友好を深めた点で成功だったように思われる。